

「群馬の万葉歌」

群馬県立女子大学 北川和秀

◎万葉集卷十四（東歌）の配列

国名判明	雑歌 5	上総 1首 下総 1首 常陸 2首 信濃 1首	東海道 — 東山道
	相聞歌 76	遠江 2首 駿河 5首 伊豆 1首 相模 12首 武蔵 9首 上総 2首 下総 4首 常陸 10首 信濃 4首 <u>上野 22首</u> 下野 2首 陸奥 3首	
	譬喩歌 90	遠江 1首 駿河 1首 相模 3首 <u>上野 3首</u> 陸奥 1首	東海道 東山道
国名不明 140	雑歌 相聞歌 防人歌 譬喩歌 挽歌	17首 112首 5首 5首 1首	

合計 230首

◎万葉集卷二十・防人歌

①天平勝宝七歳乙未二月、相替りて筑紫に遣はさるる諸国の防人等の歌

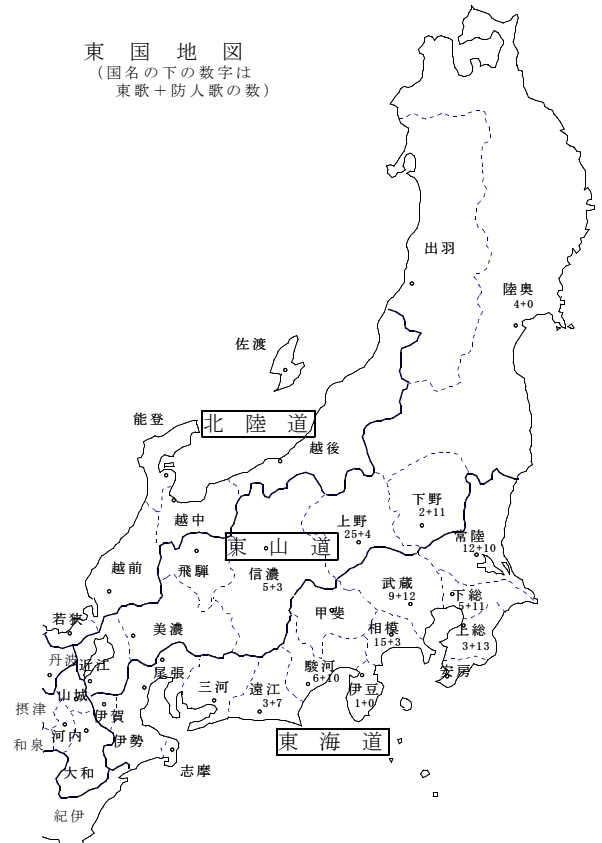
遠江国	7首 / 18首
相模国	3首 / 8首
駿河国	10首 / 20首
上総国	13首 / 19首
常陸国	10首 / 17首
下野国	11首 / 18首
下総国	11首 / 22首
信濃国	3首 / 12首
<u>上野国</u>	<u>4首 / 12首</u>
武蔵国	12首 / 20首

84首 / 166首

- ②昔年防人……………8首
- ③昔年相替防人………1首

合計 93首

東国地図  
(国名の下に数字は東歌+防人歌の数)



### 【碓氷】

3402 日の暮に碓氷の山を越ゆる日は夫なの袖もさやに振らしつ（上野東歌）  
（碓氷の山をあなたが越える日は、あなたも袖をはっきりとお振りになった。）

4407 ひな曇り碓氷の坂を越えしだに妹が恋しく忘れぬかも（上野防人歌）  
右の一首は、他田部子磐前のなり。  
（碓氷峠を越えるとき、彼女への思いが募って、もう忘れるなんてとてもできないことだなあ。）

### 【伊香保】

3421 伊香保嶺に雷な鳴りそね吾が上には故はなけども子らによりてそ（上野東歌）  
（伊香保の峰に雷よ鳴ってくれるな。私にとっては別にどうということはないけれども、あの娘が怖がるものでね。）

#### \* 「伊香保」の語源

- ・現在の「伊香保」は渋川市の町名。旧伊香保町。
- ・万葉集の時代の「伊香保」は榛名山のこと。
- ・「いかほ」という語の構成は「いか（巖）＋ほ（穂・秀）」と考えられる。
- ・「ほ（穂・秀）」は、突き出ているもの、他からぬきんでているもの。例えば、稲穂、槍の穂、波の穂などの「穂」。「炎（ほのほ）」は「火の穂」の意。ろうそくの炎の形は槍の穂とよく似ている。山の名には「高千穂」「穂高」など「ほ」の付くものがある。「いかほ」の「ほ」も同じと考えてよい。
- ・「いか（巖）」は「内部の力が充実していて、その力が外形に角張って見えている状態」（『古典古語辞典』の「いかづち【雷】」の項）を表す語で、「いかし（巖し）」「いかめし（巖めし）」「いかる（怒る）」「いかづち（雷）」などの「いか」も同じ。
- ・「いかほ」の「いか（巖）」は、この山のもつどのような性格を「いか（巖）」にとらえたのであろうか。

- ・山の姿
- ・雷の巣窟
- ・火山

3422 伊香保風吹く日吹かぬ日ありと言へど吾が恋のみし時なかりけり（上野東歌）  
（伊香保風は、吹く日も吹かない日もあると言うが、私があなただを思う恋心ばかりは、止むときがないことだ。）

- \* 参考「韓亭能許の浦波立たぬ日はあれども家に恋ひぬ日はなし」（3670）  
「荒津の海潮干潮満ち時はあれどいづれの時か我が恋ひざらむ」（3891）

3423 上毛野伊香保の嶺ろに降る雪の行き過ぎかてぬ妹が家のあたり（上野東歌）  
（上野国の伊香保の峰に降る「雪」ではないが、たやすく「行き」過ぎることができない、あなたの家のあたりよ。）

\* 参考「わが<sup>やど</sup>屋戸の君松の木に降る雪の行きには行かじ待ちにし待たむ」（1041）

3414 伊香保ろの八尺の井手に立つ虹の<sup>のじ</sup> 躰<sup>あらは</sup>ろまでもさ寝をさ寝てば（上野東歌）  
（伊香保の高い井堰の上に現れる虹がはっきりと見えるように、そのようにはっきりと二人の仲が明らかになってしまうほど一緒に寝ていられたらなあ。）

【佐野】

3420 上毛野佐野の舟橋取り放し親は離くれど吾は離るがへ（上野東歌）  
（上野国の佐野の舟橋をばらばらにしてしまうように、親は二人を引き離すけれど、私はあなたと離れたりしない。）

【多胡】

3403 吾が恋は現在もかなし草枕<sup>たご</sup>多胡の入野の将来もかなしも（上野東歌）  
（私の恋は今も切ない。そして（多胡の入野の奥ではないが）<sup>おく</sup>将来も切ないことだ。）

\* 参考

「……三郡の内三百戸を郡と成し、羊に給ひて、多胡郡と成す。……」

（多胡碑 七一年）

昭和三十年まで存在した入野村は、明治二十二年の町村合併の折、小串・黒熊・深沢・石神・中島・小暮・馬庭・岩井・多比良の九ヶ村が合併して成立。村名は、東歌の「多胡の入野」が黒熊附近に比定されるという説を採用して命名された。

【その他】

3494 子持山若鶏冠木の黄葉つまで寝もと吾は思ふ汝は<sup>あ</sup> 何<sup>な</sup> どうか思ふ（未勘国東歌）  
（子持山の若いカエデの葉が秋になって色づくまで、あなたと共寝をしたいと私は思う。あなたは どう思う？）

3413 利根川の川瀬も知らず直<sup>ただ</sup> 渡り波にあふのす会へる君かも（上野東歌）  
（利根川の浅瀬がどこなのかも考えずに、やみくもに渡って波を受けてしまったように、ばったりと出会ったあなただこと。）

3540 左和多里の手児にい行き逢ひ赤駒が足搔きを速<sup>こと</sup>み言問はず来ぬ（未勘国東歌）  
（左和多里の乙女に出逢ったけれど、私が乗る赤毛の馬の歩みが速いので、言葉を交わさないまま来てしまった。）

3560 真金吹く丹生の真朱の色に出て言はなくのみ<sup>あ</sup> 所<sup>あ</sup> 吾が恋ふらくは（未勘国東歌）  
（丹生の赤土のように、はっきりと表に出しては言わないだけだ。私が恋しているということは。）

\* 参考「白真砂御津<sup>はにふ</sup>の埴生の色に出でて言はなくのみ所我が恋ふらくは」（2725）

3405 <sup>かみつけの</sup> <sup>を</sup> <sup>ど</sup> <sup>たどり</sup> 上毛野乎度の多杼里が川路にも子らは逢はなも一人のみして（上野東歌）  
（上野国の乎度の多杼里の川へ行く道で、あの娘が逢ってくれたらなあ。一人だけで。）

3405或本 <sup>かみつけの</sup> <sup>を</sup> <sup>の</sup> <sup>たどり</sup> <sup>あはち</sup> <sup>せ</sup> 上毛野小野の多杼里が安波治にも夫なは逢はなも見る人なしに（上野東歌）  
（上野国の小野の多杼里の安波治でも、あなたが逢ってくれたらなあ。誰にも見られないで。）

3416 <sup>かほや</sup> 上毛野可保夜が沼のいはゐ蔓引かばぬれつつ吾をな絶えそね（上野東歌）  
（上野国の可保夜の沼のイハキツラが、引っ張ればずると寄って来るように、私に寄ってきて、いつまでも仲を絶やさないで欲しい。）

\* 参考「<sup>いりまち</sup> <sup>おほや</sup> 人間路の大家が原のいはゐ蔓引かばぬるぬる吾にな絶えそね」（3378）

武蔵国東歌

「西の方はるかに川嶋と聞えて、こゝにも<sup>かほ</sup> <sup>は</sup> 甲波すくねの社を見やりたるは、これなん光明院がつかさどれるなりけり。うのとしのわざはひに、其地さへながれうせて、その社は南の方三四町ばかりひきしりぞきて作りたてたとぞ。……名に高きかほやが沼も、むかしこの境内に有けるを、<sup>な</sup> <sup>かさ</sup> <sup>かつ</sup> <sup>たか</sup> 近き頃となりては佛すらなくなりしうへ、また其地さへぞうせはてたる。」（奈佐勝皐『山吹日記』天明六年1786五月十三日条）

\* 「うのとしのわざはひ」は天明三年1783の浅間山の大噴火によってもたらされた災害

4404 <sup>な</sup> <sup>には</sup> <sup>ち</sup> 難波道を行きて来までと吾妹子が着けし紐が緒絶えにけるかも（上野防人歌）  
右の一首は、<sup>すけ</sup> <sup>の</sup> <sup>よ</sup> <sup>ぼ</sup> <sup>ろ</sup> 助 丁上毛野牛甘のなり。

（難波への道が無事に行って帰ってきてくださいと言って妻が縫い付けてくれた紐がついにすり切れてしまったことだなあ。）

4405 <sup>いもこ</sup> わが妹子がしぬひにせよと着けし紐糸になるとも吾は解かじとよ（上野防人歌）  
右の一首は、<sup>ますひと</sup> 朝倉益人のなり。

（妻が、思い出すよすがにしてほしいと言って縫い付けてくれた紐は、たとえすり減って糸になっても私はほどいたりするものか。）

4406 <sup>いは</sup> わが家ろに行かも人もが草枕旅は苦しと告げ遣らまくも（上野防人歌）  
右の一首は、<sup>ふし</sup> 大伴部節麻呂のなり。

（わが家に行く人がいてくれたらなあ。そうすれば、私が苦しい旅をしていると家族に知らせてやれるのに。）